

2001年度第3回コロキウムについて

著者	萩原 弘子
引用	女性学研究. 2002, 10, p.54-54
URL	http://hdl.handle.net/10466/10079

2001年度第3回コロキウムについて

2001年度第3回コロキウムは、「18世紀啓蒙期の科学とジェンダー」というテーマで、2002年3月10日に行なった。テーマ設定の主旨は、人間の理性への信頼とその啓蒙が謳われた18世紀ヨーロッパで、理性の発現である学問領域、とりわけ自然学における女性知識人の位置を考えようということであった。まず川島慶子さん（科学史）から、18世紀フランスで物理学教科書を著わした女性、マダム・デュ・シャトレの科学的業績に関する考察を発表していただいた。つづいて弓削尚子さん（ドイツ史）から、18世紀半ばに医学と哲学の分野でそれぞれに博士号を取得した2人の女性に焦点をあてた考察を発表していただいた。参加者（15人）には、あらかじめ発表者からご案内いただいた文献を読んだうえで出席していただいた。2本の発表ののち、参加者全員で討論の時をもった。

コロキウムは、原則として本研究センターのだれかが発表者として参加できるようなテーマで行なうことにしている。そうすることで本研究センターの研究活動を活性化するためである。しかし2001年度は専任教授不在という「非常事態」の年であったのを口実に、思い切って本学研究員の専門領域とは重ならない領域でのコロキウムを企画してみた。ところが準備の勉強を始めてみてわかったことは、このテーマには歴史記述の問題として広く論ずべき女性学的課題が含まれているので、たとえ科学史、ドイツ史には門外漢であっても有意義な討論ができるということであった。近代諸科学の形成過程に性別がどう関係したかということは、単に闇に葬られた女性科学者の掘り起こしという以上に重要な問題であり、それはあらゆる分野の歴史記述に言えることだろう。結局、専門外のコロキウムを企画したつもりが、むしろ女性学の領域的広がりを確認する結果となった。

最後に、このコロキウムで本研究センターが初めて経験した素敵なことをどうしても書いておきたい。コロキウムを行なったセミナー室の隣室には、川島さんの夫君が見守るなか生後4カ月の赤ちゃんが眠り、休憩時間は授乳のタイミングに合わせた。人が学問するということが、こういうことも含むのが本来だろう。 (萩原弘子)